

論 説

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

—18 世紀中葉のメソジスト派ウェルビーイング(健康・幸福) 観をめぐって—

山 本 真 司

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

世界保健機関 (WHO) 「憲章」 前文より
健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。

(日本 WHO 協会仮訳)

はじめに

西欧に東洋から茶という飲み物がもたらされたのは 17 世紀初め頃であるが、ヨーロッパでは 17 世紀から 18 世紀にかけて、茶の効能や健康への影響、またその倫理的、経済的功罪をめぐって、いわゆる「茶論争」が繰り広げられていた。特にイギリスでは、最初は珍しく高価だった茶を楽しむ習慣が、次第に一部の階級から社会の広い層にまで広がって定着しはじめた 18 世紀の中頃に、茶飲みの功罪をめぐり激しい論争が展開されている。英国紅茶文化を研究する滝口明子によれば、これは一つには、「茶への激しい攻撃と、それに対して茶を擁護した人たちの論争」であり、もう一つは、「紅茶の起源に関する論争」であった。『英国紅茶論争』においてイギリスにおける茶論争を「紅茶論争」と呼ぶことにした理由について、滝口は以下のように説明している。

「紅茶論争」とは、このように主として一七～一八世紀のヨーロッパにおける茶をめぐる論争を指す。この時期には、実は紅茶だけでなく緑茶も多く飲まれていたので、「茶論争」と呼ぶ方がより正確かもしれない。しかし、やがて一九世紀以降イギリスで主流を占めるようになり、東洋の茶と

はまた一味違うイギリスの茶の文化を代表するようになったのは、何と
いっても紅茶である。(滝口 1996, p.8)

当時飲用された茶の種類に関しては多くの議論を呼んでいる。しかし、「ル・
コント、カニンガム、ケンペルによる 植物学上、人類学上の先駆的な試みに
も関わらず、明らかに異なる 2 種類の茶—緑茶とボヒー茶—を飲んだ当時の
ヨーロッパ人は、それらが同一種の木から採れるということをなかなか受け入
れられなかった」(エリス 2019, p.162)。1840 年代になって、ロバート・フォー
チュンが西洋人としては初めて中国本土の奥深くまで入り込んだ時に、ようや
く、カニンガムが一世紀半も前にあれほど簡明に伝えていた真実が、決定的に
裏付けられたのである。フォーチュンは、どの苗木を用いても緑または黒の
リーフティーを作れることを確証した。茶は未知の、捉え難い、人を欺く存在
であることを長い間好んできた。ヨーロッパの植物学は、自らの分類体系にこ
の東洋の謎を包摂し同化するために 2 世紀に及ぶ努力を必要としたのである
(エリス 2019, p.164)。

どちらの茶が英国で贅沢な嗜好品として持て囃されたにしても、次第にその
価格が下がり、貧しい人でも無理をすれば飲めるようになった 1740 年代から
50 年代にかけて、特に家計に窮する人々の健康や経済的支援の観点から茶に
反対した代表的人物として、滝口は二人の名前を挙げている。つまり、キリス
ト教信仰の復興に尽力し、英国メソジスト教会の創設者として知られるジョ
ン・ウェスレー (John Wesley, 1703-1791) と、熱心な慈善家で商人のジョナ
ス・ハンウェイ (Jonas Hanway, 1712-1788) である (滝口 1996, pp. 110-11)。
ハンウェイは、茶をジンと同列において非難し、1956 年から 1957 年にかけて
ジョンソン博士との間に激しい茶論争を起こしているが、いったん茶絶ちをし
ていたウェスレーが茶飲みを再開したのは、興味深いことに、その論争の直後
の 1758 年頃のことである (Rogal 1994, p.225)。この二人の論争の影響を吟味
すること自体は本論稿の目的ではないが、博愛主義的な目的が似通っていると
はいえ、ハンウェイの強引かつ過激すぎる茶への攻撃には、さすがに茶断ち決

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

行中のウェスレーでさえも共感できない部分があったであろうことは、想像に難くない（滝口 1996, pp.117-150）。

ウェスレーの茶飲の習慣に関しては、ローガル（1994）の分析が詳しい。ローガルは便宜上、ウェスレーの茶飲期間を以下の3つの代表的な期間に分類したうえで、それぞれの期間におけるウェスレーの茶飲み習慣について質的な分析を行っている。

I. 1735年10月～1736年10月：米ジョージア伝道（32-33才）

II. 1740年8月9日～1741年8月8日：ロンドン周辺で組織固め（37-38才）

III. 1782年10月3日～1783年10月2日：周辺諸島部での布教活動（79-80才）

ローガルが指摘するように、ウェスレーの日記を読む際の注意点は、彼が実際に紅茶を飲んだのか、それとも単に紅茶の会に参加しただけなのかについての明確な区別の記載がないという点である（Rogal 223）。例えば、最も多い例が、自宅および自宅外で会が開かれたという記述の後に、「茶、宗教的談話（tea, religious talk）」とだけある場合である。興味深いことに、ウェスレーを「最もメソッド的な茶飲人」（Rogal 224）と評することが可能な理由は、主に彼の茶飲の時間に対する几帳面さにある。上記の3期間において、午前1時から11時までの茶飲が全体の53%、正午から夜の9時半までが47%、ということから導かれる結論は、「ほとんどの茶飲みは午前4時から午前9時の間と、午後3時から午後6時までの間に行われた」ということである（Rogal 224）。

そして、いつジョン・ウェスレーが茶を断つ決心をしたかであるが、それは通例、彼の日記（Journal）に記されている通り、1746年7月6日（日曜日）に起こったとされる。そこには以下のように記述されている。

主に男女の組長たちと話し合って同意に達したことは、もし私たちの会の中で比較的貧しい人々が茶飲みをやめるように説得されたとしたら、時間やお金だけでなく、健康の浪費を避けることになるだろう、ということ

だ。私たちは始める覚悟を決め、その範を示すことにした。私は26年間続けてきた習慣を断つことに、多少の困難を予期した。それに伴って、最初の3日間は、多かれ少なかれ、終日頭痛がして、朝から晩まで寝ぼけ眼だった。3日目、水曜の午後、ほとんどまったく物忘れが酷くなった。夕方には祈りに治療を求めた。木曜日の朝には頭痛が止んだ。私の記憶力はいつものように回復した。そして、まさにその日から今まで、不都合を感じることは何もなく、いろいろな点で顕著な利点があった。(筆者訳、下線筆者)(Wesley 1991, 20, *Journal and Diaries III*, p. 125)

ウェスレーがメソジスト会の同胞である、おそらくとても裕福な友人に茶断ちを勧める手紙、「茶に関する友人への手紙 (*A Letter to a Friend, Concerning Tea*)」(1748年12月10日付)では、自らの体験をもとに、志を同じくする貧しい同胞たちの健康や時間、そして家計のことを考えて、どのように茶を断てばよいかについて具体的にその目的や方法を順序立てて伝えようとしている。しかし、このような断茶のアドバイスを単に経済史的、あるいは社会福祉的な観点から解釈しようとするならば、その最終第31節において明らかに表明されているような、ウェスレーのメソジスト派中心的指導者としての視点を通して語られる、18世紀中葉のウェルビーイング(幸福・健康)観を完全に見逃すことになる。そして、ウェスレーがオックスフォード大仕込みの方法で議論を論理的に組み立てる様子は、彼の主張のエッセンスがみごとに要約されている以下の最終章からも明らかである。

31. 私は自分が提案したことを実行してきました、実際には最初に意図したよりも多くの言葉を要しましたが。私は、私が取ったすべての措置の理由と、私をそうさせた動機を話し、あなたや他の人々がこの問題の反対側で主張してきたことを考察しました。

そこで、私が全体として与えたい助言は、以下のとおりです：まず、清明なる光を求めて、すなわち、これがより優れた方法であるという、完全

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

で鋭い、そして安定した確信を求めて、真剣に神に祈りなさい。万人の自己犠牲、陽気な節制、賢い儉約の精神を求めて祈りなさい。皆さんの同胞たちの様々な困窮を優しく察することができるような慈悲の心、親切な慈愛の心を持てるように。そして、心の安定のために、恐れや怒りや恥じることのない、穏やかで平静な勇気が持てるように。そうして、もう一度、心の準備を整えて、この小さな（あるいは大きな）供え物を神に捧げるのです。そしてさらに、あなたの魂と肉体を生きた供え物として、イエス・キリストを通して、神に受け入れられるものとして捧げなさい。（筆者訳、下線筆者）（Wesley 2018, 32, *Medical and Health Writings*, p. 288）

ジョン・ウェスレーは、ここで、彼が実践を始め、また他の信徒たちにも同様の実践を呼び掛けているこの断茶という行為を、神に捧げるため、自らの魂と肉体に先んじて捧げるべき「小さな（あるいは大きな）供え物（Sacrifice）」とみなしている。そして、「万人の自己犠牲（universal Self-denial）、陽気な節制（cheerful Temperance）、賢い儉約（wise Frugality）の精神」をもって、「皆さんの同胞たち（Brethren）の様々な困窮を優しく察することができるように」、確信をもって祈ってほしいと呼び掛けているのである。当時社会で大流行となっていた茶を楽しむという行為が、もし明らかに健康を害し、家計を圧迫するような有害な行為であるならば、茶を断つことは健康にとっても家計の観点から、ただ単純に、人々のより良い生活のために広く推奨されるべきものであり、そこに余程断ちがたいほどの魅力や利点、つまり人々を強力に誘惑する力がない限り、断茶という行為自体を、いわゆる神に捧げるだけの価値ある大きな、あるいは小さな「自己犠牲」、あるいは供え物とみなすことは難しかっただろう。ここでウェスレーは図らずも、断茶論の大前提として、茶というものが、単なる攻撃対象というよりも、信徒によっては大きな供え物にできるほど価値ある代償、あるいは人々にとって相当に魅力的で価値あるものであると彼自身が考えていることを、図らずも暴露してしまっている。ここで注意すべきは、ウェスレーにとって貧しさの定義は、相対的基準に基づいていたことであ

る。つまり、自分より貧しい生活を送る人は、貧富を問わず誰にとっても周囲に見つかるものであり、各々がそのような人々を救済すべきだというものである（Heitzenrater 2002, p.32）。この相対主義的な考え方は、「小さな（あるいは大きな）供え物」という表現に表れているが、その曖昧さが生む矛盾が、貧しい同胞たちのため一途に断茶を続けるウェスレーの脳裏を横切ることが全くなかったとは言えないだろう。

1 ジョージ・チェインの影響

ウェスレーが断茶論の執筆前、あるいは執筆中に読み込んだと思われる数々の本のなかでも、彼が実際に読んで参考にしたことが明確に分かっているため特に重要と思われるものが、George Cheyne（1673-1743）の *Essay of Health and Long Life*（1724）である。茶は、チェインの著書においては、コーヒーやチョコレート、そしてタバコと同様に過度の多飲が戒められ、特に、節度（moderation）の重要性が強調されている。チェインの議論に見られるような茶の利点や無害な点をウェスレーがどのように等閑視したかについて、ウェスレー自身の文章と比較して相違点を明らかにするため、少々長いが、関係する箇所をすべてここに例として挙げておきたい。以下は、同書第18節で「コーヒー茶チョコレートそしてタバコとその臭ぎタバコの使用と乱用について」、チェインが詳細に説明している箇所である。

18. 外国の贅沢品が英国で完成の域に高められた時以来、高級な人々の中で用いられるある種の飲み物がある。偉大な医者の中にはベルや本やキャンドルによってそれを大掛かりに非難する人もいれば、仰々しく推薦する人もいる。つまり、コーヒーやお茶、それにチョコレートのことである。私自身の立場から言えば、それらにどれも習慣に根付いている場合には効能を認めるが、過剰となっている場合においてはすべて有害とみなす。コーヒーについて言えば、それは単なる石灰、あるいは焦げたそば豆であるが、胃には軽いほうのものであり、何か良い香りのするものであ

る。トルコ人たちはそれを飲み、そしてブランデーの代わりにアヘンを常用する。しかしながら、このマホメットの風習によって、人々の中には過剰に摂取する状態に陥ってしまう人がいるという訴えがあるが、それは全く説得力に欠けており、根拠がないものである。彼の国でそうしている人々にとっても、それにより苦しんでいるのは我々同様である。そしてそれに堕している人々は、愚かで弱くなり、それによって痙攣状態になる。特に彼らがしばしばそうするように、それらと一緒に阿片を加えた場合にそうである。あちらの国で墮落する人たちのように、英国でも同様の状態となり、そして真面目な人々によって大いに軽蔑され、人目に晒されているのは、我が国における飲んだくれや、ブランデーをガブ飲みする輩と同じである。コーヒーの1、2杯を、ミルクを少々入れてソフトなものにするならば、冷たく湿った天候の下、あるいは水っぽく胆汁質の胃には、無害であるだけでなく、当座の安心となる。しかし、少なくとも、痩せていたり、乾燥気質の場合に、馬鹿げていて、多分、一層有害なものは、毎日2、3回遊びで飲んでみることであり、そのような者にとっては、火傷するほど熱い石灰水ばかりを飲むようなものである。用いられている茶には2種類ある。それは緑茶とボヒー茶である。大変学識のある正確な人物であり、数年間中国に住んでいたカニングム氏の情報によれば、それらはどちらも同じ低木から、一年の異なる季節に摘まれる。そして、ボヒー茶は春に摘まれ太陽の下で乾かされるが、緑茶は火で乾かされる。しかし權威があるわけではないが、私が思うに、乾燥におけるこれらの違い以外に、ボヒー茶には別の植物や土の煎じ出し（多分日本の土、アセンヤクノキ）が、何らかの種類のボヒー茶に注がれなければならないし、そうすれば、胃に柔らかさと風味、そして重さを与え、そのためそれは単なる薬となり、緑茶の自然な単純さを欠いてしまう。それは軽くてあまり強すぎもないので、あまり熱すぎないように飲めば、完全で自由な生活を送る人々にとっては大変相応しい薄めた飲み物となり、少量のミルクでソフトにすると、朝食のために、消化管を洗浄し、壊血病や尿塩を洗い流してくれる。

また、茶に輪切りのオレンジやレモンを入れると、たっぷりした食事のあとに消化を最も助けるものの一つになる。あるいは食事の合間に喉が渴いた時には、普通はあの目的のために用いられるウイスキー、あるいは強いコーディアルを飲むよりも、はるかに安全で効果的である。弱く傷つきやすい神経の持ち主は、これらの酒を飲むとなると、それらのあまりに大量の飲酒、あるいは胃の柔らかく繊細な繊維への刺激からどんなに逃れても、精神的に落ち込んだりする。そのような者は注意深くそれらを控えるべきである、すなわち、ウイスキーのがぶ飲みやちびちび飲みのようなものを。しかし、私は現在の壊血病、憂鬱病、意気消沈、そして神経の不調の頻発を、我々の祖先の時代にそうであったもの、つまり、より頻繁に、かつ自由に外国の煎じ液を飲む風習のせいにする者とは決して意見を同じくすることはできない。その原因は、その結果にはふさわしくないだけでなく、全く似ているところも関係もない。我々の知っていることは、弱く繊細な神経には、温かい水が、あらゆるものの中で最も消化を促進し助ける、ということである。そしてこれを飲むだけでも、私はそのような人たちが何人も奇跡のように回復するのを見てきており、一方、冷たいミネラルウォーター、苦味酒、コーディアルやウイスキーは、益よりもむしろ害をなしているのである。また、茶は無害な植物を水で焙煎したものに過ぎないが、その味からして、毒性のある有害な、ぴりぴり刺激のある特質をもったものでもないので、無害である、と言える。そして、我々は、それらを産する（ヨーロッパのほとんどの国よりも大きい）国での用途からも、彼らが何の害も受けておらず、それどころか反対に、消化や発汗を促進していることについては疑いなしと思っている。茶がその熱により胃や舌の層を緩めるといった議論は力をもたない。というのは、それは、茶を血液そのものよりもはるかに熱い温度で飲まない限り、そんな風に害をもたらしえないからである。我々が見ていると、バースのガイドは、いつも飲んでいるお茶と同じくらい熱い湯をかき混ぜることが少なくとも1年の半分、一日の中でも多くを占めているのに、全くそれで怪我をすることも

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

ないが、姿を見ない時は彼らが強い酒を飲みふけりすぎて、それがわき起こす渴きを鎮めることができない時である。しかし、茶をたくさん飲む人たちに私は助言しよう、血液の温かさよりもはるかに熱いものを飲まないようにと。そうすることにより、彼らはその恩恵をすべて享受するだろう。そしてそれがひょっとしたら与えうるすべての害を避けられるだろう。
(下線筆者) (George Cheyne, *Essay of Health And Long Life*, 1724, pp.60-64)

上記のチェインの解説は、現代人が読んでも、さほど違和感のないような常識的な事柄であるように思われる。しかし、もしそうであれば、このような文章からウェスレーの断茶論に至るには、かなりの力技が必要となるということは火を見るよりも明らかであり、そのことは、おそらくジョン・ウェスレー本人も心中では自覚していただろう。

2 『原始医術』(1747) —ウェスレーの健康観と信仰心

すでに述べたように、ウェスレーに関して言えば、当該の文書や断茶当時の状況を詳しく調査してみると、彼の茶断ち行為の意味が合理的には説明できないことが分かってくる。つまり、紅茶の効能についてはすでに広く知られており、過度に飲みさえしなければ健康を害することもないことを、信頼する情報源からウェスレー自身も知っていたはずなのである。それでは、なぜ彼は約12年もの長期に渡る茶断ちを決断したのであろう。以下、当時の文脈を読み解きながら、彼の茶断ち宣言自体が、ウェスレーのメソジスト的なウェルビーイング、健康観だけでなく、彼自身の信仰心の影響を大きく受けていることを考察したい。

ウェスレーは、1746年に主にロンドンのメソジスト会に属する貧しい人々のために、活動の中心的拠点3か所に無料の診療所を開設している (Wesley 2018, 32, *Medical and Health Writings*, pp.17-18)。そして、さらにできるだけ多くの貧しい人々を救う方法として、ウェスレーは、彼らが自分たちで治療できるように最新の医療法に関する情報をできるだけ安価でシンプルな形で提供し

た。それが、もともとは彼が収集した治療法集から発展した『原始医術 (*Primitive Physick*)』(1747)の出版である。この小冊子はウェスレーが生涯を終えるまでに23版を数え、18世紀から19世紀にかけて出版された医療書としては最も売れたもののひとつであったと言われる (Scheib, pp.113-14)。

ウェスレーの治療法の多くが、今から見るとかなり古風に見えることは致し方ないが、彼は少なくとも当時の標準的な医学書を広く参考にしていたのであり、同書は各地を巡回する俗人伝道師たちを通じて、英国中に散在する会にあまりなく配布されていた。ウェスレーは、他にも断茶論を含めて1748年から1782年の間に健康や治療のための本を数多く出版し続けたが、やはり人々が最も広く利用したのは『原始医術』であった (Idler 2014, p.127)。これは、1745年に出版した『貧者のための処方薬集 (*A Collection of Receipts for the Use of the Poor*)』を元に様々な治療法を増補統合して、より広い読者のために世に送り出したものである。

『原始医術』の前書き (pp. xvii-xxiv) には、ウェスレーの医療や健康に対する基本的な態度が明確に表れているが、その最終部分において、ウェスレーは、おそらく後に続く本文さえも読むことが難しいと思われる人々のために、チェイン博士の前述の本全編から彼が特に重要だと思う要点を抜粋し、各家庭の壁に貼り付けるためにちょうど良いくらいの備忘録をわざわざ作成して添付している。

15. 本書に記した薬の使用法については、自分自身の病気を知るや否やすぐ、と私なら助言するだろう (それは、複雑な病気でなければ大変容易なことであり、そうすればあなたは次第に良くなり、神を恐れる医者にかかることができるだろう)。

第一に、この後に続くコレクションに収められている病気に対しては、第一番目の治療法を使用すること (その他の治療法で手に入りやすいものがあるのならば、それもまさに同じように上手くいくだろう)。

第二に、しかるべき時間が経った後にその効果がなければ、第二、第

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

三、という具合に順に用いること。私は意図的に、(大抵の場合)一つの病気にいくつかの治療法を記しておいた。それは、すべてのものがどこでも等しく容易に手に入れることができるとは限らないからである。しかし同様に、ある者に効く薬が、必ずしも同じ病気にかかっている他の者をも直せるとは限らない。また、同じ者をいつも直せるとも限らない。それ故、様々な種類を用意することが必要であった。しかし、絶対に間違いないと言われているような薬には、‘I’の文字を追記した。

第三に、いかなる時も、あなたの養生法、あるいは生活方法において最大の正確さを守ること。すべての混ぜ合わせの、味付けの濃い食べ物を避けること。消化に良い、質素な食事をとること。そして、できるだけこのように節約すれば、苦も無く楽に首尾一貫したものとなる。あなたの胃に合うなら飲み物は水だけとし、合わなければ、良質で透き通った色の小ビールを飲みなさい。運動は、疲労しないように毎日できるだけ多く野外ですること。夕食は6時か7時に最も軽い食事をとること。早く就寝して、起きるのも遅くならないようにすること。このように着実に実行すれば、たいていの場合、半分以上治療が終わったようなものである。とりわけ、(骨折り損ではないのだから)他の治療法に加えて、例の古い、流行に因われない薬、つまり祈りを加えること。そして神を信仰しなさい。神は、「生かしも殺しもし、墓に入れたり、墓から連れ戻したりする」のだから。

16. 神の祝福によって取り戻した健康を維持しようと望む人々のために、私はいくつかの明白で簡単なルールを、主としてチェイン博士から書き写しておく。

I.1 我々が吸い込む空気は、健康にとって非常に大きな結果をもたらす。海外で長く東風や北風に吹かれていた者たちは、薄く温かい飲み物を適量、あるいは一口のパンと水を飲んでから就寝するべきである。

2. 虚弱な人々は、健全で優しく、健康的な者で、添い寝してくれたり、あるいは、とても身近にいてくれる者たちを持つべきである。

3. 健康を維持したいと思う人は誰でも、家や洋服、そして家具を、できるだけ清潔にそして心地よく保つべきである。

II.1. 飲食の重要な規則は、我々の消化力の強さに応じて食べ物の質や量を合わせることである。胃に軽く無理のないような食べ物の種類や量をいつも食べるべきである。

2 酢漬けやスモークの、あるいは塩漬けの食べ物、また香辛料をたくさん使った食べ物は、すべて体に悪いものである。

3 何よりも健康に良いのは、禁酒と、必要なだけ手間をかけた、あっさりとした食事である。

4 注意深い人々にとっては、24時間に約8オンスの動物肉と12オンスの野菜で十分である。

5 水はすべての飲み物の中で健康的なものであり、食欲を増進し、消化を最も強化する。

6 強く、特に、より多量のアルコールを含む酒は、ゆっくりではあるが、確実な毒である。

7 経験から分かることは、アルコールの飲み物を一度にすべて捨て去ったとしても、危険なことは何もないということである。

8 強いアルコールの飲み物は暴飲の悪影響を防いではくれず、水と同じくらい安全にそれを運び去ることもない。

9 ビールは、(少量の澄んだビールや時間の経ったエールを除いて) 虚弱な人々にはきわめて有害である。

10 コーヒーや紅茶は神経の弱い人にとってきわめて有害である (筆者下線)

III.1. 虚弱な人々は非常に軽い夕食をとるべきであり、それも就寝の2、3時間前にとるべきである。

2 彼らはいつも9時頃には就寝し、4時か5時には起きるべきである。

IV.1. 適度な運動は、健康と長生きにとって必要不可欠なものである。

2. 散歩は、それが実行できる人にとっては最高の運動である。そうでな

い人は乗馬がよい。外の空気は、天気が良い時には運動による利益に大きく貢献する。

3. 我々は継続的な運動によって、体の弱い部分を強化することができるだろう。従って、肺は大きい声で話したり、緩い上り坂を歩いて上がったことによって鍛えられるだろう。消化と神経は乗馬によって。腕と太ももはそれらを毎日強く擦ることによって。

4. 熱心な人々は、一日に少なくとも2, 3時間決まった時間運動すべきである。夕食前に半分を、就寝前にもう半分を。

5. 彼らは頻繁に足の毛を剃り、そして頻繁に洗うべきである。

6. 読み書きを多くする者は、それを立ってするようにするべきである。さもなければ、健康を損なうだろう。

7. 昼間も夜間も、薄着をすればするほど体が丈夫になる。

8. 第一に、胃袋が空っぽの時に運動をすべきである。第二に、ばてるまで続けるべきではない。第三に、運動後には徐々に冷やすように気を配るべきである。さもなければ風邪をひくだろう。

9. ボディブラシは最も有効な運動であり、特に虚弱なところを強化する。

10. 冷水浴は健康を大いに促進する。それは多くの病を予防する。それは発汗作用を促し、血液の循環を助け、風邪引きの危険を予防する。虚弱な人々は中に入る前に頭に水を注ぎ、素早く歩くべきである。頭から真つ先に飛び込むことは、自然への大きな衝撃となる。

V.1. 便秘は健康と長くは両立しえない。それゆえ、初めにそれを取り除くことに気を配るべきであり、それが取り除かれたら、柔らかく、冷たい、便通を促進する食事によって、その再発を予防すべきである。

2. 遮断された発汗作用（通俗的には風邪引きと呼ばれる）は、病気の一要因である。この兆候がすこしでも見られた時には、必ずゆるやかな発汗によりそれを取り除くように。

VI.1. 激昂は、ほとんどの人が気づいているよりも重大な影響を健康に及ぼす。

2. すべての激しく突然起こる激昂は、急病になりやすくしたり、実際に人々を病気のような状況に陥らせたりする。

3. 悲嘆や望みのない愛などの、緩慢で継続的な激昂は、慢性病を引き起こす。

4. 病気を引き起こした激昂が収まるまで、投薬は無駄である。

5. 神の愛は、すべての苦難の妙薬であるから、激昂自体を然るべき限度内に収めることにより、特にそれによってもたらされるすべての身体的不調を適切に予防する。それが与える言語に絶する喜びや、完全に穏やかな平静と静穏によって、それは健康と長生きのすべての手段の中で、最も強力なものとなる。

ロンドン

1747年6月11日

(Wesley 2018, 32, *Medical and Health Writings*, pp.116-119)

ウェスレーは、次々に改訂版を重ねた『原始医術』において、いくつか特徴のある指摘をしているが、その中でも茶飲みに関して一貫して注意を与えてきた点は、その過剰摂取や濃い茶を避けることであった。ウェスレーが同書で主として主張した健康法とは、西欧古代や中世の医学で、四体液説とともによく唱えられた6つのノンナチュラルズにおけるバランスをとり、不養生を避けることである——6つのノンナチュラルズとは、2世紀ギリシャの医学者ガレノスが、健康維持のために区分した「自然的事象」と「非自然的事象」のうち、後者にあたる。つまり前者は、「人間の肉体的・病理的な本性において説明されるべき『自然的原因』」を指し、後者は、「人間の文化に属する『生活形式』」を指す。また、後者の6つの要素とは、①光・空気・静寂などの環境、②飲みものと食べもの、③運動と静養、④睡眠と覚醒、⑤体液の排泄と保持、⑥感情の中庸といった生活環境保持に関する養生法である（臼田 2018）。

この6つのノンナチュラルズ（“diet, sleep, exercise, air quality, evacuations (bowel movements), and the passions”）は、ウェスレーが『原始医術』において

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

も同様に管理統制すべきものとして、その共通の枠組みを採用したものである (Madden 2009, p.185)。そして、彼は、「wellness を維持するための実証論的方法論」的観点から、節約効果の高い高価な嗜好品に関しては、特に「過剰」を避けるということにこだわるようになるのである。

ノンナチュラルズ（非自然）の過剰を避けることは長寿を促進したので、ウェスレーは飲食物や激昂において極端を避けることの重要性を説いた。これは、ある種のことを完全に避けるということにもつながっただろう。ウェスレーは、お茶やコーヒーをこの範疇に入れ、これらが高価であることや、体の震えや身震い、神経症といった好ましくない症状を引き起こす可能性があることを指摘した。一方、アルコールは全面禁止とはせず、透明色のビールやワインを適度に飲むことを認めている。しかし、過剰摂取の危険性を指摘したのは「ひと口（ドラム）」とも呼ばれる蒸留酒、特にジンで、ウェスレーはこれを猛毒と判断し、多くの神経障害の原因とした。この酒は激昂を高めるので、それを避けることは激しい感情をコントロールすることにつながり、急性疾患を防ぐ鍵となる。一方、長く続く悲しみや絶望は、慢性的な症状を引き起こす。激昂が原因で起こる病気には、それが激しいものであれ、もの憂いものであれ、まず根本的な原因を治さない限り、薬を塗っても意味がないと考えるのが普通であった。Cheyne 同様、ウェスレーも祈りと神の愛が激昂を鎮めるのに有効な癒しになると信じていた。（筆者訳、下線筆者）（Madden 2009, pp.186-7）

ウェスレーの日記からも、祈りにより様々な症状がおさまったという例が見られるが、ノンナチュラルズの事象を統制する例として、書籍だけでなく、家族への私信においても、繰り返し勧めている健康養生法は、なるべく赤身の肉や贅沢な食事を避けた軽い食事や、大量の水を飲むこと、そして、早寝早起き、冷水浴に加えて、家屋を清潔に保つことが健康維持のために重要とされた。さらに、できるだけ空気の清浄なところで大いに運動をすることであった

(p.186)。運動の中では、特に乗馬が勧められ、ウェスレー自身も戸外に出られないときには、代わりに愛用の室内馬と呼ばれる運動用の椅子を使い、上下にスクワット運動をすることを常としていた。また、『原始医術』で提供したような各種治療法に加えて、「安くて効果的な」治療法として、1756年には電気治療器を利用した治療を施せる場所をロンドンとブリストルに用意した。そして、また『原始医術』を補足するだけでなく、3年後の1759年には、匿名



図1 (左)

ジョン・ウェスレーのロンドンの自宅、食堂、ジョンの運動用室内馬 (chamber horse) (Wikimedia Commons)

図2 (下)

ジョン・ウェスレーのロンドンの自宅、書斎 (Wikimedia Commons)



ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

で『必需品：すなわち、簡単に役に立つ電気』（*The Desideratum: or, Electricity Made Plain and Useful*）を出版するほど電気治療の推進に尽力した（p.187）。

3 ウェスレーのティーポット—讃美歌と愛餐

説教と旅に追われ、きわめて多忙な毎日を過ごしたウェスレーが、なぜわざわざ反茶論を公にすることになったのだろうか。彼の茶や茶飲みに対する態度



図3（左）

ジョン・ウェスレーのロンドンの自宅、
愛用の電気治療器（Wikimedia Commons）

図4（下）

ジョン・ウェスレーのロンドンの自宅、キ
ッチン（Wikimedia Commons）



の変化や変遷とその理由や背景を考察するために、これまでほとんど関連付けられ論じられたことのない、ウェスレー自身の当時のウェルビーイング観、つまり、いかに精神的、身体的、および社会的に健康であるかということに関するウェスレーの考えについて、以下、彼を取り巻いていた物質文化や視覚文化を中心に考察していきたい。

サウス・ロンドンのイズリントン地区には、ジョン・ウェスレーのチャペルとメソジスト博物館がある。この博物館は元々 1779 年に彼自身の住居としてチャペルと同時期に建設されたものである。ジョン・ウェスレーはここで最期の 12 年余りを過ごしたのである。そこには友人のジョサイア・ウェッジウッド (1730-1795) が制作した巨大なティーポットが棚の上に飾られており、オリジナルの半分くらいの大きさの複製版ティーポットが今でもアンティークマーケットに流通している。このシグニチャーポットにみられるように、現在ではウェスレーが茶飲みの象徴となっていることは、ある意味間違いない事実であるが、それは彼が喫茶反対論者としても有名であったということと、どのように整合性がとれるのであろうか。

ここで、たとえティーポットで注ぐものが、茶ではなくほとんど水ばかりという時期が 12 年間ほど続いたとしても、ウェスレーにとって茶飲みがいかに日常的に、そして象徴的に重要なものとして扱われていたかを示す歴史的証拠をいくつか検証しておきたい。まずは、ジョサイア・ウェッジウッド (Josiah Wedgwood, 1730-1795) が彼のために特別に制作した 2 種類のティーポットである。

図 5, 6 のティーポットは、1761 年にウェッジウッドがウェスレーのために制作したといわれるものの複製であり、元来はかなり大きなサイズのポットだったが、ウェッジウッドの工場で 1908 年頃に大量生産されたときに、かなりサイズを縮小したものが作られた。いわゆる彼らにとって理想的な「夫婦愛」を一部表現するためだったのであろうか、代々、高度な裁縫技術で有名なユグノーの血を引く妻のガウン（あるいはエプロン？）のデザインから取られたと言われる花輪模様が両サイドにあしらわれ、「キャリコ」、あるいは「ウェ

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

スレー・ウェッジウッド」と呼ばれている。

説教のため 1760 年にスタフォードシャー州を訪れたときに、ジョンはウェッジウッドと会っている。ウェッジウッド氏自身も Rational Dissenter という、プロテスタント改革派の信徒であり、英国教会の強大な政治的経済的な権力には批判的であったと言われるため、ウェスレーの信条にどこか共鳴するところがあったのであろうか。ジョン・ウェスレーの肖像画のあるティーポット（図 7, 8）を収蔵するメトロポリタン美術館ウェブサイトの解説によれば、この理性的国教反対者たちは、理性と学問によって鍛えられた精神性、良心の自由を重視していたという。1758 年に生まれ変わったように茶飲みを再開したウェスレーにとって、ティーポットの制作というウェッジウッドの援護射撃は、たいへん力強く感じられたに違いない。

図 5, 6, 8 のティーポットはいずれも、治療の処方と同じく、ウェスレーの収集癖といっていいような情熱のもうひとつの対象である hymn（讃美歌）の一節を刻印したものである。ウェスレーの著作一覧を眺めれば容易に気づくように、彼の手になる聖歌と讃美歌の選集が改版を重ねている。そして、彼がもともと健康促進のために収集した治療法集も、原理療法（Primitive Physic）と



図 5 Lincoln College, Oxford.

これはロンドンのウェスレー博物館にあるオリジナルの縮小版複製である。オックスフォード大学リンカーン・コレッジのメソジスト・コレクションより。“Wesley Wedgwood Teapot.”



図 6 Lincoln College, Oxford.
“Wesley Wedgwood Teapot.”

して、讃美歌に負けず劣らず多くの版を重ねている。つまり、これらのポットが象徴しているものは、ウェスレーが希求した魂と肉体の救済の理想的な形として、茶飲みを介した聖なる会話（conversation）によって心身ともに健康な状態になるということだったのではないだろうか。

Be present at our Table Lord
Be here and everywhere adored
These creatures[original: mercies] bless and grant that we
May feast in Paradise [fellowship] with thee

We thank thee Lord for this our food
But more because of Jesus's blood
Let manna to our Souls be given
The bread of Life sent down from Heaven

主よ、我らのテーブルにいてください
ここかしこで崇められますように
これらの創造物を祝福してください
そして汝と天において宴を張れるようにしてください

主よ、我らはこの食べ物をいただけることを汝に感謝します
ただイエスが流された血ゆえに、さらに深い感謝をささげます
我らの魂にマナが与えられますように
それこそが天から下ってきた命のパンなのです

Karen Barber によれば、これらの詩はティーポットの両サイドにそれぞれ配置されているが、取っ手を右手にしたときに正面に来るのが食前の祈りであり、その反対側にあるのが食後の祈りとなっている。詩の作者は John Cennick

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

(1718-1755) という市井の説教師であり、彼の讃美歌集が 1740 年に出版されている。このティーポットの歴史については、繰り返しになるが、ウェスレーが 1760 年 3 月にイングランド中部のスタフォードシャー州 Burslem という、イギリス陶器産業の里として有名なストーク＝オン＝トレントのすぐ北部に位置する町で陶工たちに説教をしたときに、その工場の隣にある自宅の庭で作業をしていた Josiah Wedgwood に会ったことに始まる。その数年後にウェスレーのためにウェッジウッドが制作したティーポットは、なんと 1 ガロン、つまり約 4.5 リットルものお茶が入られるほど巨大なものだったという。また、詩を取り囲むリースの花輪は、夥しい数のアザミと三つ葉のシャムロック、それに大輪のバラであるが、それぞれがスコットランドとアイルランド、それにイングランドを表していることは象徴的である。装飾模様のパターンは妻 Mary Vazeille のガウンから採用したといわれるが、ジョンが茶を断るようになったのが 1746 年である。結婚は 1751 年であるが、1771 年に最終的に家を出るまで、夫の女性関係への猜疑心から何度も家出を繰り返す妻に対し、家に戻るように何度も頼んだと言われるジョンの切ない愛情が、このティーポットに込められていたのかもしれない。

ポットの詩は、ジョン・セニックが書いたこの讃美歌がもとになっているが、本来のものに少し手が増えられている。もともと 3 連の詩行があったものだが、おそらくスペースの関係で中間の連を抜いて最初と最後の連を合わせており、教会などでの会食前に信徒がいつも歌っていたものであろう。このような讃美歌は、いわゆる「ウェスレーの祝福 (the “Wesleyan Blessing”) と呼ばれ、愛餐 (fellowship meals) の前にメソジスト信徒の会合で定期的に歌われたものである (Godinez)。そして、その時、信徒によっては “mercies” と “creatures”、そして “fellowship” と “paradise” を入れ替えて歌った。セニックがメソジストを離脱した後に所属したモラヴィア兄弟団における愛餐の意味については、市川 (2015, p. 68) が詳しい。

1722 年、Nikolaus Ludwig von Zinzendorf ニコラウス・ルートヴィヒ・ツィンツェンドルフ伯爵 (1700-1760) の庇護のもと、ボヘミア兄弟団により Herrnhut

ヘルンフォートと称される共同体が建設された。これにより教団は再組織され、復興することになった。それに伴い、礼拝、同教団特有の Liebesmahl 愛餐、Singstunde 賛美の時間など日々の活動、また特別な祝祭日などで音楽は重要な役割を果たしたのである。

ウェスレーは彼自身何度も記しているように、全生涯を通じて、英国国教会の忠実な司祭でありましたので、当然のこととして、聖礼典を重視するハイ・チャーチ・マンの立場に立っていました。したがって彼は聖餐と愛餐との明確な区別をするために、聖餐のパンとブドウ酒の代わりに、愛餐では甘いパンと水、または紅茶を使用したのです。(深町 44)

ティーポットに記された銘文は、「汝の会話をキリストの福音になるようにせよ (Let your Conversation be as Becometh the Gospel of CHRIST.)」であった。この「あなた方の会話をキリストの福音にしよう。」というのは、明らかに紅茶のテーブルを囲んで交わされる「会話」の重要性を説きながらも、茶菓子とともに「会話」を弾ませるための媒介、あるいは潤滑油としての紅茶の役割の重要性も示唆していることは間違いない。そして、それ故に、このティーポッ

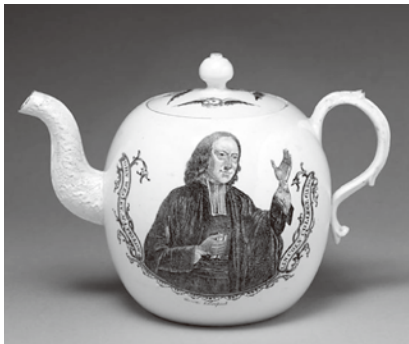


図 7
ニューヨーク メトロポリタン美術館
収蔵, Josiah Wedgwood and Sons 作
1775 年頃制作



図 8
ニューヨーク メトロポリタン美術館
収蔵, Josiah Wedgwood and Sons 作
1775 年頃制作

トは今でも人気を保ち続けているのである。

山本（2008）が論じるように、「あらゆるシチュエーション別に様々な賛美が用意されていた」ことから、初期のメソジストの様々な活動において賛美が重要な役割を果たしていたことが分かる。たとえば、「誕生日の讃美」や「洗礼の讃美」から、「お茶（の時）の讃美」や「仕事の讃美」に至るまで、「様々な場所を想定した讃美」が用意されていたのである。それでは、このように生活を送るうえで必須とされるほど賛美が求められた理由は何であろうか。

このような、いわば生活に密着した讃美をウェスレーたちが必要としたもう一つの理由としてキムブロウは、信仰の歌の記憶は「会話（対話）を引き出す」とウェスレーが信じたからだ」とする。信仰の記憶は、1. 三位一体の神への賛美を引き出し、2. クリスチャンの声を一つにし、3. 日常生活において個人あるいは共同体を、調和した全人格的な表現へと導いていくというのである。（山本 2008, p.73; Kimbrough, p.43）

このように、ティーポットと賛美は、愛餐の儀式において、次々に会話や対話を産み出すために必要不可欠な道具であったといえる。「旅、旅、旅」とまるでシェイクスピアの時代の旅役者のように説教の旅を続けたウェスレーも、父の亡霊や旅役者へのハムレットの同情心と、世の辛酸をなめる者たちに対して、裸のリア王が示したような深い憐憫の情を忘れることはなかったであろう（Rogal 2015, pp.38-40, 44-45）。そして、そのような同胞兄弟姉妹たちとの魂の交流を求めて、荒野のリアのように、あるいは父の亡霊と対話するハムレットのように、ウェスレーは人々と対話し、神に祈ったのではあるまいか。

4 恋愛と結婚のくびき

ジョン・ウェスレーが、会の信徒たちに対して茶飲みを控えて献金のために節約しようと呼びかけることを決めたのは 1747 年 7 月のことだった。ジョンは、6 月 17 日に 44 才となったばかりであり、8 月 9 日には最初のアイルラン



図9

メアリー(通称モリー)・ヴァジール(1710-1781) メソジスト派とジョン・ウェスレー・ハウス博物館収蔵

ド伝道を行うことになっていた。しかし、1749年の46才の時には、ジョンの愛したグレース＝マレーが、彼の伝道旅行中に、弟チャールズの直談判により、もう一人の恋人であった説教師ジョン・ベネットと結婚してしまう事件が起こったのだ。そして、ジョン自身は冬のロンドン橋で滑ってくるぶしをねん挫して担ぎ込まれた先で手厚い看護をうけたことから、スコットランドで最初の伝道が行われるという多忙な1751年に、裕福な48歳の未亡人でユグノー(フランスのカルヴァン派プロテスタント)のマリー＝ヴァジールと結婚することになる。ジョンが54才となる1757年には夫人との不和が表面化し、68歳となる1771年1月には、マリー夫人がついにジョンの許を去ることになり、二人の結婚生活に実質上の終止符を打つことになった。

ジョン・ウェスレーがようやく茶飲みを再開することになるのは、肺病などによる極度の衰弱からの回復と予防を目的に、医師の John Fothergill が治療を行った1758年以降というのが通説である。ただ彼の茶飲み再開の時期については諸説あり、本人の記憶の曖昧さのためか、日記には医師の治療自体が1753年11月から翌年1月までと記録されており、ウェスレーが1755年までには徐々に茶を飲み始めていたのではないかと、という説もある(Wesley 1991, 20, pp. 482-Wesley 2018, 32, p.273)。しかし、ヒル氏からの批判に対する弁明を

述べた 1772 年出版の文書において、ウェスレーは、茶断ちに関しては「12 年間その模範を示した。それから Fothergill 医師の指示により、肺炎がおさまった時に再びそれを飲んだ」としている (Wesley 1772, p. 27)。

自らの茶断ちを 8 年や 9 年間と公言するよりも、12 年間とすることは、キリスト教的観点からは 12 人の使徒を想起させるだけでなく、一年に月が 12 回満ち欠けするなど、神秘的な数字であることから、たとえ記録と多少の齟齬があったとしても、アドベントカレンダーのように一定の達成感を与えるため、12 という神秘的な数字が天命のように彼の頭に浮かんだ可能性も否定できないであろう。

また、別の見方も可能かもしれない。肺炎が悪化して自らの死を覚悟した 1754 年 12 月 26 日に、ウェスレーは自らの死後に使用させるための墓碑銘をしたためている。そこで横たわる自らの「死骸」を、「火の中から取り出された松明 (A Brand plucked out of the burning)」と言い表している。Brand という単語は、文語で、燃え木を表すとともに、詩的表現においては “flaming Brand” というように燃える松明を意味した (OED, I.2: W. Somerville, Chace ii. 409 1735)。

ある意味、ウェスレーは、死の淵から復活したのであり、彼がその回復途中の 1 月 4 日においてさえ、休養のために空いた時間に新約注解を書き始められたことに感謝している。7 日にはようやく規則的生活が送れるようになり、ついに 2 月 26 日に 4 か月間休止していた説教を始めることになった時、ウェスレーは、「わたしの口から彼の真理の言葉を奪い去らなかったと神を讃えるのに一体どんな理由があるだろうか！」と叫ばずにはいられないほどの感動を日記に残している (Wesley 1991, 20, p.485)。

かくも壮絶な体験をしたあとならば、それまではお手本となるためにあれば自己犠牲を払って強い意志をもって貫いた茶断ちの行であったとしても、自ら新たな「松明」の光としてさらに強く生まれ変わったと思ったとしても不思議ではない。そして、彼は心機一転、お茶を飲まずに節約を呼び掛けるという消極の方策より、お茶を飲んでさらにアクティブに広く活動していく、という積極的な方策に大きく転換したのであろう。

ともあれ、ウェスレーの茶絶ちの12年間は、良い意味でも悪い意味でも、彼の年譜においては珍しく長期の恋愛・結婚期と重なっており、しかもその時期は彼の伝道活動が大きく発展する時期にも重なっていることに注目すべきであろう。

つまり、断茶の期間は、職業上避けられないとしても、愛餐などで女性たちとの親密なコミュニケーションに発展する場ともなりうる場で、彼自身が断茶をはっきりと公言しているために、すくなくとも男女の雰囲気盛り上げる贅沢な香りのお茶ではなく、ただの水やハーブティーで代用することができる。そのため、彼は、良心においても体面においても、周囲に対して、あるいは特に妻に対して、気まずい思いをすることから幾分かは逃れることができたであろう。

茶飲みの再開が直接には医者による勧めによるものだったとはいえ、経済的に恵まれない同胞たちへの彼の関心の大きさを考えれば、すでに通説となっている、滝口の以下のような意見は至極妥当なものであるように思われる—「少なくともウェスレーが飲茶を再開した1760年前後には、1740年代以上に茶が普及して、貧しい人たちの生活や健康を阻害するものとは捉えられなくなっていたことが、最大の要因だったと考えてよい。そうでなければ、彼は茶を再び飲み始めはしなかったであろう」（滝口1996, p. 117）。つまり、紅茶の価格が貧しい人たちの生活を壊さない程度に下がってきたので、もうそろそろ大丈夫だろうということでウェスレーが茶飲みを再開したのではないか、という議論である（Ellis, 越朋彦訳2019, p. 293; Wesley 2018, 32, p. 270）。大筋としては恐らくそのように考えても問題ないと言えるだろう。

しかし、まず価格が下がったからといって誰もが大量に茶を飲むようになれば、健康問題は解決どころか悪化するであろうという推測は、ウェスレーも恐らく立てたようである。1770年代にRichard Hillによって偽善的態度だと批判されながらも、ウェスレーは、茶飲み再開後も自身が亡くなるまで同書の再出版を続けたのだが、それは、まるで闇夜の松明のように、世間に適度に警鐘を鳴らし続けることに意味があると思ってのことだったのであろう（Wesley 2018, 32, p.274）。

しかし、すでに引用したウェスレーの日記や、断茶を勧める手紙の文章において、その対象や彼の真の意図が示唆しているように、ウェスレーの断茶の時期は、メソジスト派の重要な体制固めの伝道遠征が開始した時期や複雑な恋愛・結婚期、さらにハンウェイ対ジョンソン博士の激烈な茶論争の時期とも重なっており、紅茶の値段が半分になったから断茶による自己犠牲の価値が低くなり、断茶をする意味もあまりなくなったので再開しようか、というように単純な決断でもなかったであろう。ジョン・ウェスレーの茶飲み再開が、「ウェスレー研究家たちによって、ソクラテスの妻と同程度の、歴史上珍しい悪妻と言われるようになった」夫人との不和が表面化した1757年の翌年の決断だった、ということの意味は、彼の精神的自由にとっても、案外大きかったかもしれないのである（野呂, p. 204）。もちろん、当該の手紙では、断茶によって節約できたお金は、毎週貧しい同胞の窮状を救うため、自分に倣って慈善箱に入れるようにと、友人に対して何度も勧めている。そのため、指導者自身が茶飲みを再開してしまうと、お茶代を節約してチャリティへの寄付を増やすという行動により範を垂れる、という当初の目的自体が大いにぶれてしまうことは本人にも予測できたことだろう。

ここで浮上するのは、そもそもウェスレーの反茶論がなぜ友人への手紙の形式をとっているのかという疑問である。友人への助言という形で親しみを持って語りかけている。しかし、これは茶飲の習慣をもっていた時期のテーブルトークの名残かもしれない。つまり、茶飲と会話はセットなのである。それを確信したからこそ、ウェスレーのティーポットにも茶飲と会話の重要性が、讃美歌の文言によって明確に刻まれているのではないか。その重要性については、奇妙にも文章においては何も触れていない。おそらく、健康と経済的理由を一義的には優先したためであろう。

ウェスレーが試みたこの壮大な社会実験は、いったいどのような結果をもたらしたのだろう。ウェスレー自身は、その後12年間、フォザーギル博士が茶の使用を再開するよう命じるまで、12年間茶を断ち続けた。弟のチャールズもなんとか断茶を始めたが、その期間は不明である。ロンドン・メソジスト派

のうち約 100 人が指導者の例に倣い、このほかにも多くの人がこのほかにも、多くの人が節制を始め、それまでよりも使用量を減らした。これは、控えめに言っても、ウェスレーの苦勞に満ちた人生の中で最も意義深い決断の一つだったのだ。ロンドン協会にこれを提案した 10 日後、彼は友人たちから 30 ポンドの寄付を集めている。この提案はロンドンの社交界にも提出され、その 10 日後、彼は友人たちから「貸株」のために 30 ポンドを集めていた。これはすぐに 50 ポンドに膨れ上がり、その結果、その年の終わりには、250 人以上の貧しい人々が必要な救済を受けることができたという (Tyerman, p.523, Madden p.178)。断茶の効果を、寄付金という数字でのみ測ることには無理があるということに、彼もいずれ気づくことになるのであるが。

5 ラヴ・フィースト、アガペ、愛餐

ウェスレーの時代は、プライドなどの罪につながる習慣としては、喫茶の習慣などよりも改めるべき習慣として、宗教的には、より強い飲酒に照準が合わせられていた。健康の秘訣は、何事においても過剰を避けることと、完全に理解していたウェスレーである。それは、あたかもパッションという激昂を押さえこもうとしながらも、ついには「過剰」に呪われた自分の娘たちによって、最後には命を落とすことになるリア王を、自らの教訓、戒めとしているかのようである。貧しい人たちの健康と幸福のために、自らが模範として断茶することを選択したことだけは間違いないだろう。しかし、友人への形で書かれた彼の断茶を勧める小論は、あえてくじを引いて神の意志に委ねることをしなかったことから分かります。彼自身の強い意志の表明であったのだ。その間も実践されていたお茶会や愛餐においては、彼は紅茶や緑茶よりも、水やハーブティーを好んだだろう。しかし、もともと、モラヴィア派でも、原則としてはライ麦パンと水だけ用意していたのだから、その意味ではウェスレーは、原始に回帰したともいえるだろう (Towlson, p.209)。

禍福は糾える縄の如し、ということわざがあるが、その生涯を貧しい人々の幸福のために尽くしたジョン・ウェスレーにとって、彼の 12 年にわたる断茶

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？

の期間とは、個人と共同体をめぐる愛のテーゼ自体の孕む矛盾をいくつも自分自身の中で抱え込みながらも、個人的なことに関してはひたすら忍耐と辛抱が肝心、と心得ていたといった難しい期間であったのかもしれない。実際よりも少し長めの12年という、キリスト教徒にとっては縁起の良い区切りの年数を記録したウェスレーの心に浮かんできたのは、ようやくこれで一区切りついたという安堵だったかもしれない。

また、ある時、暴徒から逃げなくてはならなかったジョン・ウェスレー自身も、隣接するアルポート農場に避難し、その納屋で説教をした後に愛餐をしたと言われている(“The Alport Lovefeast.”)。図10のカップは、そのような特別な愛餐の礼拝で使われたものであろう。愛餐とはモラヴィア派から借用した儀



図10 (左)
“Love Feast Cup”
Wesleys Oxford Homepage

図11 (下)
ラヴ・フィーストのチケット
(Cyclopædia of Methodism, p.551)



礼で、ウェスレーはこの献身的な行為をメソジズムに導入した。一般的には、賛美歌が歌われ、祈りが捧げられ、またお互いに対して証しも捧げられた。他の一般の人々が、彼らの「回心経験」や神への信仰の深まりについて話すのを聞くことは、非常に強力な効果をもたらす可能性がある。親睦と共同体の行為として、パンやケーキが分けられ、集会中に回される同じカップで水やお茶が飲まれた。しかし、細菌の危険性が広く理解されるようになると、愛餐は廃れていった。教会やチャペルによっては、愛餐用のカップが残っていたり、特別な日のために記念のカップが作られたりしていた（“Love Feast Cup”）。また、図 11 のように、初期には参加するためのチケットが、参加者の名前入りで信徒らが所属するクラスという地域に根差した組会での3か月ごとの巡察の際に、牧師によって相応しい人物のみにメンバーシップの証として配られた。初期はチケットに象徴的な図像も描かれていた。後になると、聖句の一節など、徐々にシンプルなものになっていった。しかし、もちろん、このような愛餐の終わりは、祈りで終わるだけでなく、貧しいものへの献金が行われるのが常であった。（*Cyclopaedia of Methodism*, p.550）

しかし、この愛餐にたいして、世間ではやはりある種の偏見が芽生えてきたことも事実である。図 12 は、「あるメソジスト派の人物、ラヴ・フィースト」と題して、1772 年にロンドンで発行された風刺画である。ジョン・ウェスレーによって、1738 年に始められたラヴ・フィーストでは、参加者による歌と証言が会食の間に行われるのが常であった。妻のシスター・レイチェルが、ふいに長期の出張から帰宅した夫のブラザー・ドゥインドルが愛餐をしていた部屋に入ってくるのを乱暴なやり方で止めようとしている。彼女の左手は相手の首元をつかみ、右手はふいごを振り上げている。ドゥインドルとは、衰弱という意味の擬人化であり、逆に、ふいごは空気をおくり、楽器を鳴らしたり火をおこしたりする焚き付け役の器具である。手前のテーブルはひっくり返り、二匹の犬は床に散らかった食事の残骸を食べているが、相手のケーキやパンを切り分けることにより散らかる様子は、すでに当時から非難的になっていた（*Towlsion*, p.214）。そして、彼女とまさに先ほどまで「ラヴ・フィースト」を

ジョン・ウェスレーはなぜ〈茶断ち〉をしたのか？



図 12

“A Methodist, LOVE FEAST.” The Colonial Williamsburg Foundation 収蔵。

I. Read 作，制作日：November 28, 1772, 彫版印刷

していたメソジスト派の牧師キャントウェルは、窓際の机の下に隠れ、おびえながら様子をうかがっている。風刺画の下に書かれた詩のタイトルは、「The GOSPLE WIFE or the BELLOWS LECTURE」と、ゴスペルのスベルミスであろうか、ふいごのレクチャーとは、彼女の「神聖なる愛の炎（flame of holy love）」をさらに燃え上がらせる道具の説教、訓戒、教えとして、この状況が意味する矛盾と混乱の状態を表現しているのである。

壁の肖像画は、左がGeorge Whitfield（1714-1770）であり、右側が、ジョン・ウェスレーである。後者の下には、福音の使者、ジョン・ウェスレー師と記されている。夫のドインドル氏の名前の入った箱が入り口の上に置かれているが、これは仕事で長期に渡り不在にしている間に彼が妻に書き送った手紙が恐らく収納されているのだろう。窓辺のテーブルの上のノートには、旧約聖書の箴言 7:23 からの引用「彼女は声が大きく頑固である」が書かれており、彼女のように夫の名誉を汚す女性を非難している。左側の壁には、恩寵の文字の下に、朝に唱える賛美歌が貼られており、さらに壁の中央では、キリスト教ソサ

エティ（会）の同胞たち（Brethren and Sisters）によって守られるべき規則と秩序とある下に、同胞であるドゥインドル家が会合の場に指定されている。そして、そのさらに左側には、さかさまに転倒した世界と書かれている紙の真下に、傾いたチェス盤が掛けられている。そして、その下の机の上には、『完全なる賭博師』の本とカードなどのギャンブル道具が置かれている。版画の最下段に記された詩の内容は以下のとおりである。

福音妻、あるいはふいごの訓戒

我らが同胞レイチェルは長らく闘っていた、神聖なる愛の炎を鎮めようと、ついに成功し、キャントウエルが現われ、彼女の高まる懸念を鎮めようとする。彼女は嘆息し、彼はうめき声をあげ、彼女は胸を波打たせる。各々がお互いに祝福を受けようとし、ついに、彼女は憐れむような顔で語る。ドゥインドルは何年も・・・そして、そういう状況なら、十分だ、彼は駆けつける、仕事を済ませて。彼女の不安は消え、彼の賞品は得られた。しかし幸福は、成り行き任せだった。ドゥインドルが戸口に雷のような音をたてて帰り、念入りに（食卓は司祭を隠す）。彼女は主人を中に入れるが、奥へは入れず、叩いて追い返す、キャントウエルが無事に安全に出られるように。

キャントウエルは、まさに「噴出できない」司祭であり、彼が隠れるテーブルの近くには、皮肉なことに、彼の書籍『結婚の慰め、あるいは罪人への助言』が床に落ちている。奇妙なことには、床に散乱したラヴ・フィーストには、ナイフや肉片らしきものは確認できるものの、お茶などの定番の飲み物もコップも見当たらない。この風刺版画が製作された1772年と言えば、ジョン・ウェスレーの妻マリーが前年1月に最終的に家を出たばかりの頃である。図12のゴスプル（ゴスペル？）という名の女性の襟元が、図9のマリーの襟元にそっくりであり、また、プライドが高く、夫の名誉を汚すような、いわゆる悪妻と世間にみられていることも同じであり、良い知らせであるはずの綴りも

間違えることにより、そのゴスブル妻は、「福音の使者、あるいは牧師 (Minister of the Gospel)」としてのジョン・ウェスレーの面目を完全に潰してしまっているということを表現しているようだ。

さて、ここで茶断ちのテーマに戻ろう。特に説教後の回心場として、愛餐 (agape, or love feast) の場で茶が演出する親密なコミュニケーションというのが、伝道において大きな意味をもつことについて、一番良く理解していたのはウェスレー自身だっただろう。もしそうだとすると、やはりジョン・ウェスレーの茶断ちは、純粹に茶飲みの有害性を非難するためという目的のためだけではなく、まずは自らを支持してくれる多くの貧しき同胞たちの「全き身体的、精神的、社会的健康」をも願っての願掛けの側面があったのではないだろうか。もちろん、自分の主張がより一層説得力を持つようにするためには、多少の迷いはあったとしても、自らが率先して実践することを選んだのであろう。茶飲みの善し悪しについては、当時たとえハンウェイやジョンソン博士のような大物同士が議論してもなかなか結論が出ないくらいの難しい問題であったことを考えると、ウェスレーには、他の判断不可能なケースと同様に、本来なら神の意向に従うために、いつものように聖書を利用したくじを引くという選択肢もありえたのである。結婚のように自分自身のことなら躊躇せずにくじを引いたジョンであるが、おそらくこの場合は、あえてそれを避けたのではないか (Towlson, p.33)。本人は紅茶の利点を多く自覚していながらも、貧しい同胞たちの窮状を軽減するという当初の願望成就のために約 12 年間という長い間、茶断ちを続けたことには変わりはないだろう。しかし、すでにみたように、ジョン・ウェスレーが茶断ちをしていた期間中、彼の恋愛や結婚生活においても大きな変遷があったことを考えると、彼が茶会による多くの女性との交流を避けることによって、今度は一人の女性と向き合うために、恋愛に発展しそうな親密な機会を極力避けるためにも、この茶断ち宣言は都合がよかったかもしれない。また同時に、実際に茶断ちを指導者たちが実践すれば、彼らが公的、私的に参加する茶会においても、あえて高価な緑茶や紅茶を用意する必要がなくなるために、経済的には負担の軽減にも大きく役立ったことは間違いな

いだろう。

6 断茶と願掛け

宗教者ウェスレーの茶断ちについてさらに考察を進めていく際に、ここで考えておきたいのは、茶断ちと願掛けの関係である。ウェスレー自身、33歳の時に、ジョージアでのソフィア・ホプキー嬢（18歳）との結婚可能性についてなど、しばしば議論によっても決められない事柄は、モラヴィア教徒の習慣に従って、聖書を利用した「くじ」を引いて決めている。しかし、いくらウェスレーの尊敬する人々の影響とはいえ、ある意味、理性を超えた占いの運命論にも大きく影響されている面があるようだ（野呂 pp.131-32）。彼の茶断ちに関連する一次資料を読んでいくと、断茶の理由としては、第一義的には彼がいつも一番に心にとめていた貧しい同胞たちの健康と幸福のためという理由があることは間違いない。断茶を勧める文章には、健康と節約の両面から合理的に結論を導き出しているように見えるが、前述のとおり、よく知られていた紅茶の効能や、説教のあとの茶会の重要性など、自分の議論に都合の悪い面についてはあえて書かないという傾向もみられる。

しかし、元来、茶断ちとは、英国に茶をもたらした日本においても、古くから願掛けの一種として認知されていた。例えば、日本における茶断ちについて歴史を紐解いていくと、古くは15世紀頃より、将軍に近い仏僧の日記などに断茶の記録を辿ることができる。『日本国語大辞典』は、茶断ちとは、「ある事の成就を願って神仏に願掛けした時などに、自分の心に決めた一定期間、茶を飲まないという誓いをたてること」と定義している。また、それは塩断ちなどと同様に、神仏に願をかけて自分が決めた一定の期間だけ特定の飲食物を口にしないことでもある。最も古い例としては、同辞典に挙げられている『蔭涼軒日録』の延徳三年〔1491〕四月四日の「往慈泉庵。断茶以来始喫茶」という記述に「断茶」という言葉が使われている（『蔭涼軒日録』p.449 [p.1975]）。またウェスレーの時代に近い茶断ちの例としては、以下の二例が挙げられている。富本・名酒盛色の中汲（お菊幸助）〔1793〕「白山様へ願かけて茶だちする

のもわたしゃそなたに添ひたいばかり」と、歌舞伎・勝相撲浮名花触〔1810〕大切「芸者冥利と茶断（チャダ）ちして、願ひ願うたお庇にや」である。

一般的に言って、茶断ちは、願をかける当人の好きな嗜好品や薬などをしばらく断つことにより、願掛けの効力を高められることが可能になると信じる民間信仰のひとつである。それが、15世紀末の断茶から18世紀末から19世紀にかけての茶断に至る過程において、茶飲の大衆化とともに、政治的宗教的な公的願掛けから、主に色恋など私的な願掛けの行へと移り変わっていったようである。ウェスレーの断茶宣言は、もちろんそれが宗教的な動機によるものであることは間違いないが、それに加えて、彼独自の健康観や幸福感、経済観念、貧民救済や同胞愛などが混然と一体となっている上に、1730年代にジョンが大きな影響を受けた臣従拒誓者ウィリアム・ローの神学の、「神に従って生活をきよめるところの聖化と幸福は一致する」といった神秘主義的思想の残滓も垣間見られるようである（野呂 p.115）。

茶断ちの願掛けのルーツに関して日本からヨーロッパに話を戻すと、図13のように、例えばイタリア語に *fioretto* という言葉がある。小学館『伊和中辞典』第2版によると、それは元来「小さな花」という意味から派生し、選ばれた人や物、そして、精華や極上、さらに、複数形で、（有名人物の）記念的行為、業績、エピソード、精華集を表す—そして、例としてはアッシジの聖フランチェスコ（1181年～1226年）について弟子の修道士たちによって14世紀に記された伝記『聖フランチェスコの小さき花（“Fioretti di San Francesco”）』において、「（聖母マリアや聖者への祈りとしての）ささやかな禁欲の行為」を意味することとなり、さらには「お茶断ち、ワイン断ちのように自分の好物を断って表す」ようになった（『伊和中辞典』第2版）。当時教皇絶対主義者（papist）と非難されることもあったか、実際、直接の言及もほとんどないことから、ジョン・ウェスレーがアッシジの聖フランシスコからどのような神学的影响を受けていたかについては明らかにはなっていない。しかし、清貧と悔悛を広場や街頭で説き、また貧者や病人のための奉仕に生涯尽力したことを考えれば、ジョンがキリスト教の長い伝統の中で、自然に願掛けをするようなカト



図 13

“Fioretti”, Francesco d’Assisi

『聖フランチェスコの小さい花』

ウゴリーノ・ディ・モンテ・サンタ・マリア
作, ミラノ, 1476-1479

BEIC デジタル図書館 (Wikimedia Commons)

リック的メンタリティに親和性を持ち、部分的に取り入れたとしても不思議はないだろう (Heitzenrater, pp. 47-49)。また、彼の愛用したティーポットの側面のコロナ（輪）型の花輪を見るたびに、ウェスレーは高慢で嫉妬深かった妻への断ち切れない愛と同時に、彼の断茶の願掛けによってどれほど多くの貧しい兄弟姉妹たちが救われたかにも思いを馳せたことだろう。

おわりに

結局のところ、ウェスレーにとって茶、あるいは茶飲みとは何だったのだろうか。ウェスレーは反茶の論客として有名であるが、その人生を振り返ってみると、彼が茶の愛好家であったことは間違いない。日記からも明らかとなり、茶飲み行為が日常生活に完全に組み込まれている期間には、起床から就寝までの間に定期的に茶飲みが実施されて、相応の効果を発揮していたはずである。また、彼の収集した処方箋集から『原始医術』を再編纂する間に、茶の効能については、間違いなく多くの利点についても明白に理解していたのである。しかしながら、彼自身の関心の主な対象である多くの貧しい同胞たちのために、複雑で高価な治療薬や治療法を避けるという原則を採用した結果、その延長線上で、当時は徐々に貧しい人々にも手が届く価格に近付いてきたとはい

え、自分も招待される愛餐などで頻繁に茶を使用することにより、特に経済的に余裕のない同胞の兄弟姉妹たちの家計がひっ迫し、崩壊することをまずは心配したのであろう。茶飲み後に自らが体験した痙攣やしびれなどの体調不良自体は、彼が本当に経験したことかもしれないが、茶飲みを再開した後は、そのような茶飲みによる体調不良が記録されていないことをみれば、それが長期間断茶しなければいけないほど、医学的には彼の神経や体質に合わないというようなものではなかったことがわかる。その意味で、ウェスレーは、健康よりも幸福という意味の *Well-being* の追求のために、まさに祈るような気持ちで茶を飲むことを断ったのだらう。

愛餐で、特に個人の家に招かれてお茶をする機会には、貧しい家庭で経済的にも余裕がない家庭でも、ジョンたちを茶菓子と緑茶や紅茶でもてなそうとすることも多々あったに違いない。そのようなもてなしの心に対し、ひそかに心を痛めたため、ジョンはおそらく高価なお茶を断る理由とするために、茶断の勧めを公開したということもありうるだろう。“*Homo sum: Humani nihil a me alienum puto*”というローマの喜劇作家テレンティウスの有名な格言を、ウェスレーはこの断茶を勧める小論の表紙の中央に飾っている。つまり、「私は人間である。人間に関わるものにおいてはいかなるものも自分と無縁であるとは思えない」と彼は自身の自己犠牲の行為を見事に人道的見地から正当化しているのである。これが『自虐者』という劇からの引用であることを考えると、ジョンが茶飲みを再開した後に、偽善者と批判されながらも、頑なに断茶を勧める小論を出版し続けたとき、心中では自虐的であったに違いないと推し量れるのである。そして、自虐的であってもなくても、彼は間違いなく、この人間に関わるあらゆる事象への幅広い共感を表すことばを一方で心の中で唱えながら、この書を自らの魂や肉体とともに神に捧げていたに違いないのだ。

* 本研究は、青山学院大学経済研究所の2021年度短期研究プロジェクトの成果である。経済学部八木隆之先生には、聖書の翻訳語を中心に貴重な助言を頂き、お礼申し上げます。

参考文献

- “The Alport Lovefeast.” *Methodist Heritage News*, Autumn 2018, pp.4-5. <http://www.methodistheritage.org.uk/heritage-news-autumn-2018.pdf>
- Ardolino, F. “The saving hand of God: the significance of the emblematic frontispiece of the *Religio medici*.” *English Language Notes* 15 (1977): 19-23.
- Barber, Karen. “The John Wesley Teapot Table Blessing.” March 30, 2012. Prayer Ideas Homepage. <https://www.prayerideas.org/the-john-wesley-teapot-table-blessing/>
- Bardell, E B. “Primitive physick: John Wesley's receipts.” *Pharmacy in History* 21 (1979): 111-21.
- “Be present at our table, Lord.” *The Canterbury Dictionary of Hymnology*. Canterbury Press. Web. 25 Jan. 2023. <<http://www.hymnology.co.uk/b/be-present-at-our-table,-lord>>.
- Bertucci, Paola. “Revealing sparks: John Wesley and the religious utility of electrical healing.” *British Journal for the History of Science* 39 (2006): 341-62.
- Bolander, V. “A preliminary examination of John Wesley’s “Primitive Physick.” *The Bookman* 10 (1983): 3-10.
- Butler, David. *Methodists and Papists: John Wesley and the Catholic Church in the Eighteenth Century*. London: Darton Longman and Todd, 1995.
- Callaway, C. W. “John Wesley’s Primitive Physick. An essay in appreciation.” *Mayo Clinic Proceedings* 49 (1974): 318-24.
- Cheyne, George. *An Essay of Health and Long Life*. London, 1724.
- “Constitution.” World Health Organization (WHO) Homepage. <https://apps.who.int/gb/bd/PDF/bd47/EN/constitution-en.pdf?ua=1>
- Cule, J. “The Contribution of John Wesley (1703-1791) to Medical Literature.” *Histoire des Sciences Medicales* 17 (1982): 328-31.
- Ellis, Markman et al. *Empire of Tea: The Asian Leaf That Conquered the World*. Reaktion Books, 2015. (マークマン・エリス他著、越朋彦訳『紅茶の帝国：世界を征服したアジアの葉』研究社, 2019)。
- Ellis, Markman et al. *Tea and the Tea-Table in Eighteenth-Century England*. ProQuest Ebook Central. Taylor & Francis Group, 2010
- Godinez, Raquel and C. Michael Hawn, “History of Hymns: ‘Be Present at Our Table, Lord.’” 28 August 2019. Discipleship Ministries: The United Methodist Church Homepage. <https://www.umcdiscipleship.org/> Accessed November 27, 2022.
- Gorman, Joe. “John Wesley and Depression in an Age of Melancholy.” *Wesleyan Theological Journal* 34 (1999): 196-221.
- Gorman, Joe. “The Vital Relationship between Holiness and Health: Rekindling John Wesley’s Holistic Vision of Salvation.” *Wesleyan Theological Journal* 51 (2016): 89-108.
- Hanway, Jonas. *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames ... In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea ... With Several Political Reflections; and Thoughts on Public Love ... By a Gentleman of the Partie [I.E. Jonas Hanway]*, printed by H. Woodfall, 1756.
- _____. *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth, to Kingston Upon Thames: Through Southampton, Wiltshire, &C. ... To Which Is Added an Essay on Tea. ... With Several Political*

- Reflections: And Thoughts on Public Love. ... By Mr H****** [I.E. Jonas Hanway]. The Second Edition, Corrected and Enlarged. London, 1757.
- Heitzenrater, Richard P. *The Poor and the People Called Methodists, 1729-1999*. Nashville: Abingdon Press; Kingswood Books, 2002.
- Holifield, E. Brooks. *Health and Medicine in the Methodist Tradition: Journey toward Wholeness*. Wipf and Stock Publishers, 2019.
- Hutton, Joseph Edmund, *A Short History of the Moravian Church*. London: Moravian Publication Office, 1895.
- Hughes, Melanie Dobson. "The holistic way: John Wesley's practical piety as a resource for integrated healthcare." *Journal of Religion and Health* 47 (2008): 237-52.
- Idler, Ellen L., ed., *Religion as a Social Determinant of Public Health*. Oxford: Oxford University Press, 2014.
- Johansen, John H., "John Cennick 1718—1755: Moravian Evangelist and Hymn Writer." *The Hymn* 6 (1955), 87-97.
- Julian, John, *A Dictionary of Hymnology Setting Forth the Origin and History of Christian Hymns of All Ages and Nations*. London: J. Murray, 1891.
- Kimbrough, S T Jr. *Music and Mission: Toward a Theology and Practice of Global Song*. New York: General Board of Global Ministries, 2006.
- Lichtwardt, H A. "Ancient Therapy in Persia and England: Being Extracts from "Therapeutics of Joseph," Herat, 1511 A.D., and from John Wesley's "Primitive Physick," London, 1772." *Annals of Medical History* 6 (1934) : 280-284.
- "Love Feast Cup." Wesley's Oxford Homepage. <https://www.wesleysoxford.org.uk/places/ceramics/alisons-seventh-post-love-feast-cup>
- Madden, Deborah. *"A Cheap, Safe and Natural Medicine": Religion, Medicine and Culture in John Wesley's Primitive Physic*. New York: Rodopi, 2007.
- _____. "Wesley as Adviser on Health and Healing." *The Cambridge Companion to John Wesley*, edited by Randy L. Maddox and Jason E. Vickers. Cambridge: Cambridge University Press, 2009, pp. 176–189.
- _____. "John Wesley on holistic health and healing." *Methodist History* 46 (2007): 4-33.
- Maddox, Randy. and Jason E. Vickers, editors. *The Cambridge Companion to John Wesley*. New York: Cambridge University Press, 2009.
- _____. and Emma Hornby, eds. "John Cennick." *The Canterbury Dictionary of Hymnology*. Canterbury Press, 2013. <http://www.hymnology.co.uk/j/john-cennick>
- Madden, Deborah, editor. *John Wesley's Holistic Concept of Medical Sciences, The Environment, and Holy Living*. London: Epworth Press, 2008.
- _____, editor. *'Inward & Outward Health': John Wesley's Holistic Concept of Medical Science, the Environment and Holy Living*. Wipf and Stock Publishers, 2012. ProQuest Ebook Central.
- Malony, H N Jr. "John Wesley's *Primitive Physick*: An 18th-century Health Psychology." *Journal of Health Psychology* 1,2 (1996): 147-59.
- McCutchan, Robert Guy. *Our Hymnody: A Manual of the Methodist Hymnal*, 2nd ed. Nashville: Abingdon-Cokesbury Press, 1937.

- “A Methodist, LOVE FEAST. “Encyclopedia Virginia Homepage.” <https://encyclopedia.virginia.org/10883-4e68147ffae8a78/>
- The Museum of Methodism & John Wesley’s House Homepage. <https://www.wesleysheritage.org.uk/>
- Moore, R. L. “Justification without joy: Psychohistorical reflections on John Wesley’s childhood and conversion.” *History of Childhood Quarterly* 2 (1974): 31-52.
- The Museum of Methodism & John Wesley’s House, Accessed November 27, 2022: <https://www.wesleysheritage.org.uk/the-museum-of-methodism>.
- Nausner, Michael. “TOGETHER WHOLE: A Participatory Understanding of Health from a Wesleyan Perspective.” *Wesley and Methodist Studies* 12 (2020): 179–89.
- Neibyl, K H, and C Webster. “Science, medicine and the Puritan society.” *The Journal of European Economic History* 8 (1979): 149-56.
- Ott, P W. “John Wesley on Health: A Word for Sensible Regimen.” *Methodist History* 18 (1980): 193-204.
- _____. “A Corner of History: John Wesley and the Non-naturals.” *Preventive Medicine* 9 (1980): 578-84.
- _____. “John Wesley on Health as Wholeness.” *Journal of Religion and Health* 30 (1991): 43-57.
- Porter, R. “Medicine and Religion in 18th-century England: A Case of Conflict?” *Ideas & Production* 7 (1987): 4-17.
- Rappaport, Erika Diane. *A Thirst for Empire: How Tea Shaped the Modern World*. Princeton: Princeton University Press, 2017.
- Rogal, Samuel J. “Pills for the poor: John Wesley’s *Primitive Physick*.” *The Yale Journal of Biology and Medicine* 51 (1978): 81-90.
- _____. “John Wesley Takes Tea.” *Methodist History* 32 (1994): 222-228.
- _____. *The Literary Influence of Shakespeare upon Charles and John Wesley*. Lewiston, N.Y.: E. Mellen Press, 2015.
- Rousseau, G S. “John Wesley’s ‘Primitive Physic’ (1747).” *Harvard Library Bulletin* 16 (1968): 242-56.
- Scheib, Karen D. “Christian Commitment to Public Well-Being: John Wesley’s “Sensible Regimen” and *Primitive Physick*.” *Religion as a Social Determinant of Public Health* edited by Ellen L. Idler, Oxford: Oxford University Press, 2014, pp. 113-32.
- _____. “Christian Commitment to Public Well-Being: John Wesley’s ‘Sensible Regimen’ and *Primitive Physic*.” *Religion as a Social Determinant of Public Health*, edited by Ellen L. Idler, New York, 2014. ProQuest Ebook Central.
- Skinner, Daniel, and Adam Schneider. “Listening to Quackery: Reading John Wesley’s *Primitive Physic* in an Age of Health Care Reform.” *The Journal of Medical Humanities* 40, 1 (2019): 69-83.
- Takau Shimada and Akiko Takiguchi, editors. *A Collection of Early English Books on Tea*. 5 v. Osaka: Eureka Press, 2004. (別冊日本語解説「茶の文化史：英国初期文献集成」/ 滝口明子解説付)
- Towilson, Clifford W. *Moravian and Methodist: Relationships and Influences in the Eighteenth*

- Century. London, Epworth Press, 1957.
- The United Methodist Hymnal. Hymnary.org Homepage. Calvin University.
<https://hymnary.org/hymnal/UMH>
https://hymnary.org/text/be_present_at_our_table_lord
https://hymnary.org/text/we_thank_thee_lord_for_this_our_food
- Watson, J.R. “Randy Maddox: John Wesley says, ‘Take care of yourself’” <https://faithandleadership.com/randy-maddox-john-wesley-says-take-care-yourself>
- Watson, J. Richard. “Be Present at Our Table, Lord.” *The Canterbury Dictionary of Hymnology*. Canterbury Press, accessed November 27, 2022.
- “Wesley, Charles”. *Oxford Dictionary of National Biography* (online ed.). Oxford University Press.
- “Wesley, John”. *Oxford Dictionary of National Biography* (online ed.). Oxford University Press.
- Wesley, John. *Some Remarks on Mr. Hill’s Review of All the Doctrines Taught by Mr. John Wesley*. Bristol, 1772. Eighteenth Century Collections Online.
- _____. Single Works. *An Examination of the Rev. Mr John Wesleys Primitive Physic: Shewing That a Great Number of the Prescriptions Therein Contained, Are Founded on Ignorance of the Medical Art, ... And That It Is a Publication Calculated to Do Essential Injury to the Health of Those Persons Who May Place Confidence in It, Etc.* London, 1776.
- _____. *The letters of the Rev. John Wesley, A.M.*, edited by John Telford, London: Epworth Press, 1931. 8 v.
- _____. *The Works of John Wesley, Volume 20: Journal and Diaries III (1743-1754)*, edited by W. Reginald Ward. Nashville: Abingdon Press, 1991.
- _____. *The Works of John Wesley, Volume 32: Medical and Health Writings*, edited by James G. Donat and Randy L. Maddox. Tennessee: Abingdon Press, 2018.
- _____. *A Collection of Psalms and Hymns. Published by John Wesley ... And Charles Wesley ... The Sixth Edition.* printed by William Pine, 1762.
- _____. *A Collection of Psalms and Hymns. Published by John Wesley ... And Charles Wesley ... The Seventh Edition.* William Pine, 1765.
- _____. *A Collection of Psalms and Hymns. Published by John Wesley ... And Charles Wesley ... The Tenth Edition.* R. Hawes, 1779.
- _____. *Examination of John Wesley’s Primitive Physic.*
- _____. *Hymns and Sacred Poems ... Third Edition [of the Third Collection.]*. London, 1756.
- _____. *Primitive Physic, Etc.* Epworth Press, 1960.
- _____. *[Primitive Physic: Or, an Easy and Natural Method of Curing Most Diseases ... The Twenty-Third Edition.]*. Twenty-fourth ed., G. Whitfield, 1792.
- _____. *Primitive Physic: Or, an Easy and Natural Method of Curing Most Diseases.* By John Wesley, M.A. A new ed., printed for Hawes, Clarke, and Collins, 1796.
- _____. *Receipts from Primitive Physic.* [s.n.], 1971.
- Wesley, John and William Henry Paynter. *Primitive Physic. John Wesley’s Book of Old Fashioned Cures and Remedies. Edited by William H. Paynter, Etc. (Selection from the 1755 Edition, with Additional Cures and Remedies from Earlier Editions.)*. Parade Printing Works,

1958.
“Wesley Wedgwood Teapot.” Wesley’s Oxford Homepage. <https://www.wesleysoxford.org.uk/places/ceramics/wesley-wedgwood-teapot>
Wesleyan-Anglican Blogspot (August 21, 2014), Accessed November 27, 2022: <https://wesleyananglican.blogspot.com/2014/08/the-wesley-teapot.html>.
Young, Carlton R., *Companion to The United Methodist Hymnal*. Nashville: Abingdon Press, 1993.
_____. *The United Methodist Hymnal: Book of United Methodist Worship*. 1989 Nashville: United Methodist Publishing House, 2003.
- 市川克明「モラヴィア兄弟団の管楽アンサンブルについての一考察」『愛媛大学教育学部紀要』62 (2015): 67-78.
『伊和辞典』第2版, 小学館, 1999.
『蔭涼軒日録』名著普及会, 1980.
ウェスレイ, ジョン『J. ウェスレイ手紙集』山口徳夫訳, 伝道社, 1975.
_____.『標準ウェスレイ日記』山口徳夫訳, イマヌエル総合伝道団, 1984.
臼田 夜半『聖ヒルデガルトの「病因と治療」を読む』ポット出版プラス, 2018.
角山栄『茶の世界史: 緑茶の文化と紅茶の社会』改訂版, 中央公論新社, 2017.
シュミット, M.『ジョン・ウェスレー伝』高松義数訳, 新教出版社, 1985.
「世界保健機関憲章前文 (日本 WHO 協会仮訳)」日本 WHO 協会 《<https://www.japan-who.or.jp/about/who-what/charter/>》
高橋忠彦「中国茶史におけるロバート・フォーチュンの旅行記の意義」『東京学芸大学紀要』(1990) 41: 101-111.
滝口明子『英国紅茶論争』講談社, 1996.
テルフォード, ジョン『ジョン・ウェスレーの生涯』深町正信訳, ヨルダン社, 1988.
『日本国語大辞典』第2版, 小学館, 2003.
野呂芳男『ウェスレー』清水書院, 1991.
平尾真智子「ヨハンニティウス (フナイン・イブン・イスハク) の『ガレノスの小治療学入門』における non-naturals の概念」日本医史学雑誌第45巻第2号 (1999): 216-17.
深町正信「メソジスト信仰運動の愛餐をめぐって」『ウェスレー・メソジスト研究』第10号 (2009): 31-45.
松崎芳郎『年表茶の世界史』八坂書房, 2012.
山本美紀「現代に生きるメソジストと音楽——グローバル・ソング Global Song (グローバル・ヒムノディ Global Hymnody) の視点から——」『ウェスレー・メソジスト研究』第8号 (2008): 67-79.
レオン, エレイン『英国レシピと暮らしの文化史: 家庭医学、科学、日常生活の知恵』村山美雪訳, 原書房, 2020.